

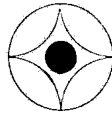
現代日本文學大系

28

若山牧水飯田蛇笏
太田水穗水原秋櫻子
窪田空穂山口誓子
前田夕暮中村草田男
土岐善麿加藤楸邨
川田順石田波郷

集

筑摩書房



現代日本文學大系 28

昭和四十八年八月十五日

初版第一刷発行

若山牧水
太田穂水
建田穂水
前田夕暮

土岐善麿
川田順
飯田蛇笏
水原秋櫻子

山口誓子
中村草田
加藤郷集
石田波郷

著者

若山牧水
太田穂水
建田穂水
前田夕暮

土岐善麿
川田順
飯田蛇笏
水原秋櫻子

山口誓子
中村草田
加藤郷集
石田波郷

発行者

井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一一九一
電話東京(一九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社 製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

(分類) 0392 (製品) 10028 (出版社) 4604

目次

巻頭写真
筆蹟

窪田空穂集

まひる野
土を眺めて

五

一五

若山牧水集

死か芸術か

山桜の歌(抄)

前田夕暮集

收穫

水源地帯

三元

三二

太田水穂集

つゆ艸

冬菜

土岐善麿集

NAKIWARAI

六月

一三

一四

三

三

七

三

山口誓子集	山口誓子集		
凍港	凍港	二五	三七
葛飾	葛飾	二六	二八
晚華	晚華	二六	二八
水原秋櫻子集	水原秋櫻子集		
椿花集	椿花集	二七	二九
山廬集(抄)	山廬集(抄)	二八	三〇
飯田蛇笏集	飯田蛇笏集		
鷺	鷺	二九	三一
山海經	山海經	二九	三一
川田順集	川田順集		
和服	和服	三〇	三二
中村草田男集	中村草田男集		
長子	長子	三一	三三
火の島	火の島	三一	三三
万緑	万緑	三一	三三
加藤楸邨集	加藤楸邨集		
寒雷	寒雷	三二	三四
穂高	穂高	三二	三四
石田波郷集	石田波郷集		
鶴の眼	鶴の眼	三三	三五
惜命	惜命	三三	三五

〔付録〕

短歌史上の自然主義（抄） 窪田章一郎 四七

水穂短歌の展開 太田青丘 四〇

哀果時代の土岐善麿 木俣 修 四六

俳句一筋 飯田蛇笏 四二

飯田龍太

楠本憲吉

水原秋桜子 藤田湘子 四三

純粹俳句 山本健吉 四六

年譜 四八

著作目録 四九

若山牧水集

かしかかして飲みはどめたる一合の
ニ合のさけの夏のめぶぐれ ね水

死か芸術か

本書の初めに

本書には昨年の秋に出版した「路上」以後の作を収めた。昨年九月から本年七月まで、即ち我が忘れ難い明治年号の最終一年間に成つた歌である。

明治四十五年七月二十一日に惶しく原稿をまとめて書肆に渡し、翌二十二日に私は東京を去つてこの郷里に帰つて来た。父危篤の急電に接したためであつた。それで、本書の体裁などもあらましのことを相談しておいたきり、あとは校正まで東雲堂の西村辰五郎君を頼はした。原稿は自身で認めた。配列の順序は例によつて歌の出来た時の順序に従うた。一首々々の上はまだ鮮かな記憶が存してゐる。

「昨年の春出版した『別離』以後の作約五百首をあつめてこの一冊を編んだ、昨一年間に於ける我が生活の陰影である。透徹せざる著

者の生きやうは、その陰影の上と同じく痛ましき動揺と朦朧とを投げて居る。あての無い悔恨は、これら自身の作品に対する時、ことに烈しく著者の心を刺す。我等、真に生きざる可からざるをまた繰返して思ふ。」と「路上」の初めに書いて居る。その悔恨と苦痛とをばそのまゝまた本書の上にも推し及ぼさなくてはならぬことを心から悲しく思ふ。

ことに、これから数年間、この零落し果てた山おくの家にこのまゝ留つて、憐れな老父母を見送らうと決心した今日、いまゝで我がまゝを極めてゐた自身の生活を見返る時、更に多少の感慨の動くを禁じ得ないのである。この「死か芸術か」を界にして、私の生活はどう移つて行くであらう。これからの我が背景を成すべきこの郷里は山と山との峽間五六里の間に涉つて戸数僅かに三百に満たぬ村である。其処から一歩も出ることなしに暮して行くつもりで居る。

一昨夜来の大雨で、我が家のすぐ下の溪は一丈余も水が増した。溪から直ぐ削つたやうに聳え立つた向ふの山の中腹には矢張りこの雨のために急に三つ四つの真白な小さな滝が懸つた。峯には深い雲が白く濺んで居る。

この頃漸くこの二階の部屋まで上つて来られるやうになつた父は、この小さな滝の一つを指して、あの小市滝にあの位の水が落ちるやうになつたから、もうこの雨もあがる、と独

りごとのやうに私の側で云つて居る。

明治大帝御葬儀の話、乃木將軍殉死の噂も何だかよその世界に起つたことのやうに遠く遠く耳に響く。實際この村に於てはそれらの事よりこの雨で栗が何升余計に拾へたこと、積んでおいた材木が何本流れたことの方が遙かに重大な事件であるのだ。

大正元年九月十八日

日向の国尾鈴山の北麓にて

若山牧水

手術刀

蒼ざめし額つめたく濡れわたり月夜の夏の街を我が行く

あるかなき思ひにすぎりさびしめる深夜のわれと青夏虫と

わが家に三いろふたいろ咲きたりし夏くさの花も散り終りけり

かなしくも痛みそめたるものおもひ守りて一日もの喰べず居り

野にひとり我が居るゆゑかこのゆふべ木木のさびしく見えわたるかな

根を絶えて浮草のはなうすいろに咲けるを摘
めばなみだ落ちぬれ

粟刈れるとほき姿のさびしきにむかひて岡に
あを草を藉く

独り居ればほのかに地のにほふなり衣服ぬぎ
すてて森に寝ねて居む

おほいなる青の朴の葉ひと葉持ち林出づれば
わが身さびしも

いかに悲しく秋の木の葉の散ることぞ髪さへ
痛め、いのち守らむ

わが痛めるいのちの端に触れ触れて秋の木の
葉の散りそめにけり

なにに然かおびゆるものぞ我がいのち身をか
ためたるすがた寂しも

いづくやらむころのすみのもの思ふかたち
は見ゆれ痛むともなし

かもめかもめ青海を行く一羽の鳥そのすがた
おもひ吸ふ煙草かな

わが手より松の小枝にとびうつる猫のすがた
のさびしきたそがれ

ただひとつ風にうかびてわが庭に秋の蜻蛉の
ながれ来にけり

しのびかに遊女が飼へるすず蟲を殺してひと
りかへる朝明け

地にかへる落葉のごとくねむりたるかなしき
床に朝の月さす

鬱々とくるわより帰りひとを見ず朝の林に葉
をわけて入る

わが髪にまみれて蟻の這ふことも林は秋のう
らさびしけれ

あたたかき身のうつり香を悪みつつ秋の青草
噛めば苦かり

秋花の茎を噛み切る歯のさきのつめたさよ、
朝のこのうつり香よ

秋の市街しづかに赤く日を浴びぬやがてなつ
かしきわが夜は来む

高窓の赤き夕日に照らされて夜を待つわれら
秋の夜を待つ

秋の街にゆふべ灯かけのともることいかなれ
ば斯く身に沁むらむ

なにやらむ思ひあがりて眼も見えず秋の入り
の街をいそぎぬ

酒無しにけふは暮るるか二階よりあふげば空
を行く鳥あり

螢のごとわが感情のふはふはと移るすがたが
ふつと眼に見ゆ

我がうしろ影ひくごとし街を過ぎひとり入り
ゆく秋植物園

植物園の秋の落葉のわびしさよめづらしくわ
が静かなること

ふるさとの南の国の植物が見ゆるぞよ秋の温
室の戸に

うなだれて歩むまじいぞ桜落葉うす日にひか
りはらはらと散る

あぢきなく家路のかたへ向きかふる夜霧の街
のわがすがたかな

其処に在り彼処にみえしわがすがたさびしや
夜の街に霧降る

ねがひしはこの静けさか今朝のわがころの
すがた落葉に似たり

秋かぜや日本の国の稲の穂の酒のあぢはひ日
にまさり来れ

心のうへ狭霧みな散れあきらかに秋の日光に
親しましめよ

眼をあげよもの思ふなかれ秋ぞ立ついざみづ
からを新しくせよ

それ見よさびしき膝の濡るものさかづきを
手になにを思ふぞ

見も知らぬをんなのそばにひと夜来てねむら
むとするころの明るみ

友を見てかなしきころ潮しきたる、見まわ
せど酒に代ふるものもなき

あはれまこと雨にありけりまたしても降るか、
さきほど星の見えしに

動物園のけもの匂ひするなかを歩むわが背
の秋の日かげよ

身も世もなく児をかはゆがる親猿の真赤きつ
らに石投げつけむ

秋の入日、猿がわらへばわれ笑ふ、となりの
知らぬ人もわらへる

秋の日の動物園を去らむとしかろき眩暈をお
ぼえぬるかな

はつとして歩みをとどめなにやらむ払ふがこ
とく癖ぞ袖振る

停車場に入りゆくときの静かなるころよ眼
にうつる人のなつかし

好むとなき煙草を手づから買ふことがうれし
くもあり、停車場の店に

袂よりたばこ取うでて火をつくるときここ
ろをなつかしと思ふ

わびしやなまたも夜つゆの軒したにかへりて
雨戸たたかねばならず

帰りきてまちを手さぐり灯をともすその灯を
ともす、うれしや独り

眼の見えぬ夜の蠅ひとつわがそばにつきゐて
離れず、恐しくなりぬ

ひとり寝の夜のねまきにかふるとてほそき帯
をばわが結ぶかな

ひとりねの枕にひたひ押しあてていのりに似
たるよろこびを覚ゆ

わが寝ざめ、ころかなしくかきくもりいた
める蔭にこほろぎの啼く

常盤樹の蔭には行かじ、秋の地のその樹のか
げのなにぞ憎きや

眼馴れたるこの樹四時に落葉せず黒き実ぞな
る、秋風立てば

かなしくも我を忘れてよろこぶや見よ野分こ
そ樹に流れたれ

いつとなく秋のすがたにうつりゆく野の樹々
を見よ、静かなれころ

飛べば蜻蛉のかけもさやかに地に落つ、秋は
生くこと悲しかりける

秋の地に花咲くことはなにももの虚偽ぞこと
ごとく踏み葬るべし

なに恨むころぞ夕日血のごとしわが眼すさ
まじく野の秋を見る

手を切れ、双脚を切れ、野のつちに投げ棄て
ておけ、秋と親しまむ

秋となり萩はな咲けばおどろきてさしくむこ
ころ、見るにしのびず

われとわがを指吸ひつつ身もほそく秋に親しむ野の独りかな

草原は夕陽深し、帽ぬげば髪にも青きいなご飛びきたる

歩きながら喰はむと買ひし梨ひとつ手に持ちながら入りぬ林に

眺め居ればわが眼はつちとなりにけり秋の木の蔭落ちたる地に

黒き蟲くろき畑のつちのかげに昼啼いて居りほそくないて居り

森よさらば、街へいそがむくろ髪のかなびける床をおもふに耐へねば

見てあればこころ痛みてたへがたし深夜あやしき汝がすがたかな

くれなゐのりぼんをつけて夜の挨拶する子を見れば悲しとぞおもふ

昼は野の青き日に触れ、夜は燃ゆるひとの身にふれ、秋は悲しき

落葉と自殺

手探ぐれど手には取られず、眼開けば消えて影無し、さびしあな寂し

自殺といふを夢みてありき、かなしくも浮草のごとく生きたりしかな

わが眼こそ愁ひの巢なれ、晴れわたる秋の日にかげにさびしく瞑づる

夜も昼も愁ふればとてなぞは斯く眸も暗く濁りはてけむ

窓ひらけばばつと片頬に日があたるなつかしいかな秋もなかなばなり

あきらかに秋は潮し来ぬ、にぎりたるわれのいのちの血の新たなり

枯草のわが身にあはれ血のごとく、夜深き市街、雨落ちきたる

雨、雨、雨、まこと思ひに勞れるき、よくぞ降り来し、あはれ闇を打つ

かなしげに霧に月照り、娼婦等の群れたる街のわがうしろ影

月の夜の街の夜霧に鳥のごとくさびしき姿、行くか何処へ

秋更けぬ、落葉に似たるわが愛のかなしき瞳ぬれてかがやく

窓ひとつ北にひらきてうす暗きこの部屋の好さよ、友が椅子に倚る

あてもなく見知らぬ街路に歩み入り、とある二階に夕飯を食ふ

わづかなる窓のあひさにうす曇るゆふべの空を見つつ箸取る

もの蔭に眠るがごとく郊外の墓地にひと知れずけふも来りぬ

暎ちよとてかなしく臉撫づるごとく墓場の樹木の葉の散りきたる

わがめぐり墓場のつちに散りしける落葉はなにの言葉なるらむ

ひろひ来し墓地の落葉の散れる部屋、灯かけに独りねころびて居る

停車場の黒き柱に身をもたせ汝が行く国の秋をおもふかな（五首、友を送りて）

ふり返るなかれといのり人ごみのうしろ姿をじつと見送る

どよめける旅客のなかにただひとり落葉のごとくまじりし汝よ

東京を人目しのびてのがれ出づる汝がうしろ影、われも然かせむ

別れ来て銀座の街に秋の木木かけ濃き午後を行けば靴鳴る

秋、飛沫、岬の尖りあざやかにわが身刺せかし、旅をしぞ思ふ

まだ踏まぬ国国恋し、白浪の岬に秋の更けてゆくらむ

秋かぜの紀伊の熊野にわけ入らむ、鳥羽の港に碇をあげむ

法隆寺のまへの梨畑、梨の実をぬすみしわかき旅人なりき

大和の国耳なし山の片かけの彼の寺の扉をたかばや此の手

十月、十一月、相模の国をそこここと旅しぬ、
歌三十一首。

茶の花を摘めばちひさき黒蟻の蕊にひそめり、
しみじみ見て棄つ

わが身は地、畑のくろつち、冬の日の茶の花のなどしたしいかなや

秋の相模に畑うつひとよ、汝がそばにわれ草抜かむ、旅のひと日なり

歩み居れば森もいつしか尽きにけりいざ帰らばやいざ帰らばや

松ばやし暴風雨に休ふれし木をさがす相模の友の背丈のたかさよ

相模の秋おち葉する日の友が妻わすられぬ子に似てうつくしき

縁がはの君が真紅のすりつばをふところにして去なむとおもふ

ほどもなく動きいだせる夜の汽車の片すみにわれ静かに眼をとづ

膝に組む指にいのちをゆだねおきて眼をこそ瞑づれ秋の夜汽車に

あをあをと海のかたへにうねる浪、岬の森をわが独り過ぐ

浪、浪、浪、沖に居る浪、岸の浪、やよ待てわれも山降りて行かむ

地よりいま生れしに似る、あを海にむかひて語るふたつ三つの言葉

またもわれ旅人となり、けふ此処のみさきこそ過ぐ、可愛しきは浪

うねり寄る浪に見入れれば、ゆらゆらと浪のすがたし、こころ悲しむ

見てあれば浪のそこひに小石揺れ青き魚揺れ、わが巖うごく

深きより悲哀こころにうかび出づ、見よ海のうへに鳥啼いて居り

沖津辺に青浪うねる、浪のかけにわが暗きこころ行きて巣くへる

海は死せでありけり、青き浪ぞ立つ、いたましいかな砂にわが居る

わがめぐり濡れし砂より這ひ出づる蟹あまたあり、海に日沈む

ただひとり知らぬ市街に降り立ちぬ、停車場前に海あり、浪寄る

鳶いろのひとみの児等のゆきかへる日本の港にわれも旅人

黒いろのあやしき鳥よ、やよ鳥ごこの港に数
おほき鳥

行くにあらず帰るにあらぬ旅人の頬に港の浪
蒼く映ゆ

海にひとつ帆を上げしあり、浪より低し、悲
しや夕陽血に似て滴る

朱のいろの浪かなしけれ、落日に眼瞑づれば
おつる涙のあつさ

港の岸ちひさき旗亭、船を見て林檎噛み居れ
ば煤煙落ちきたる

港には浪こそうねれ、夕陽は浪より椅子のわ
が顔に映ゆ

木の花のごとく匂ひて明けてゆく夜はうらが
なし、はな札を切る

横浜の波止場の端に鳥居り、我居り、鳥われ
を逃れず

冬の日の砂丘の蔭に砂を掘る、さびしき記憶
あらはるるままに

浪に酔ひしかほろほろに我がこころすす
り泣きして海辺を去らず

たまたまに朝早く起き湯など浴び独り坐りて
むく林檎かな

庭の冬樹のはだへにあたる日のいろと、朝林
檎をもとむるころと

掌のうへの林檎の重み、あるとなき朝のなや
みに瞑ぢたる瞳

見よあれ、うれしげに手にも持つことか今朝
の林檎のなどてや斯からむ

林檎の真白き肉にいとちさきナイフをあてぬ、
思ひは淋し

林檎林檎さびしき人のすむ部屋にやるせなげ
にも置かれし林檎

おとろへし生命の酸味のひややかに澄む朝な
り、手にとる林檎

冬の陽のあたる片頬にひそやかにさしそへて
みぬこの紅き実を

なにやらむさびしき笑ひ浮きいづる片頬にあ
てぬつめたき木の実

うるはしき冬にしあるかな独りさびしくこも
れる部屋にけふも夕陽す

はらはらと降り来てやみぬ薄暗き窓辺の檜の
葉に残る雪

はらはらに雪はみだれつうす黒き檜の葉は揺
れ我が窓暗し

糸のごとくけむりのごとく衰へしわれの生命
にふるへて、雪降る

雪ぞ降るわれのいのちの瞑ぢし眼のかすかに
ひらき、痛み、雪降る

木に倚れどその木のころと我がころと合
ふこともなし、さびしき森かな

眼のまへに散りし木の葉に惶しくもの言はむ
とし涙こぼれぬ

森のなかにちさき畑あり、夕日さす、麦の青
き芽いたましきかな

地よ感謝す、汝とし居れば我がこころしづか
に燃えて指も触れ難し

地よ汝に對ひてわれの坐りしを記憶せよ今日
さびしき日なりき

海の岸にうづくまるもこの森に来て木の根に
居るもわが眼開かず

わが手足われの生命のそのままに今日こそ動
け、死なむとぞ思ふ

あはれ広き森にしあるかな、眼をとほくはな
ちてはまた瞑ちて開かず

落葉せる林に入ればいらいらと皮膚こそ痛め、
手に怖づるや

死は見ゆれど手には取られず、をちかたに浪
のごとくに輝きてあり

この掌の土とわれのいのちの滅ぶこと、いづ
れなつかしいづれ悲しき

木の根に落葉かき藉き手をあつる我が広き額
のなつかしきかな

出づるな森を、出づるな森を、死せるごとき
その顔を保て、出づるな森を

あはれいま煙のごとく燃えいづる朽ちし生命
ぞ、触るるなおち葉

斯く居る間に手足の爪の尺と延びよ、わが皮
膚森の朽ちし葉となれ

冬の陽は煙に似たり森も似たり、さびしきわ
れのうしろ影かな

むぐらもちわが爪先の落葉のかけの地掘り、
わがいのち燃ゆ

土龍来よ、地にかくれて冬の陽のけぶれるを
見ざるべし、出で来よ土龍

その枝折りこの枝を折り、一葉無き冬がれの
森に独りあそべり

信濃より甲斐へ旅せし前後の歌 十六首。

山に入る旅人の背のいかばかりさびしかるべ
きおもへわが友

おなじくば行くべきかたもさはならむなにと
て山へ急ぐころぞ

間ふなかれいまはみづからえもわかずひとす
ちにただ山の恋しき

友よいざ袂わかたむあはれ見よ行かでやむべ
きこのさびしきさか

さびしさを恋ふるころに埋れて身にことも
なし、山へ急がむ

山恋ふるさびしきころなものにめぐりあ
ひけむ、涙ながるる

ひとすちにひとを見じとて思ひ立つ旅にしあ

れば消息もすな

なにゆゑに旅に出づるや、なにゆゑに旅に出
づるや、何故に旅に

山に入り雪のなかななる朴の樹に落葉松になに
とものを言ふべき

雪ふかき峽に埋れて木の根なす孤独に居らむ、
陽も照るなかれ

ただひとと伐り残されし種子松の喬くしげ
れり春となる山

枝もたわわにつもりて春の雪晴れぬ一夜やど
りし宿の裏の松に

ただ一羽山に烏の啼くことも幹にわが影のう
つるもさびしや

雪のこる諏訪山越えて甲斐の国のさびしき旅
に見し桜かな

をちごちに山桜咲けりわが旅の終らむとする
甲斐の山辺に

見わたせば四方の山辺の雲深み甲斐は曇れり
山ざくら咲く

足袋ぬぎてわか草ふめばあぢきなやなにに媚
びむとするころぞも

木木はみなそびえて空に芽をぞ吹くかなし
み居れば踏む草もなし

折しもあれ春のゆふ日の沈むとき縦の木立の
なかに居りにき

帰らむと木かけ出づれば、となりの樹、かな
しや藤の咲きさがりたる

この額かなしき雨よ濡らせかしものを思ふと
なにも知らぬげ

縦のかげ雨もやみにき立ちいでむ、おゝ簀蟲
の濡れてさがる

さびしといふ我等がころむきむきに燃えわ
たりつつ夏となりにけり

はつ夏のときは樹の蔭の地にまろび帽ぬげば
いや恋しさの燃ゆ

植物園の松の花さへ咲くものを離れてひとり
棲むよみやこに

あるとなきうすきみどりの木の芽さへわが悲
しみとなるも君ゆゑ

やるせなきおもひの歌となりもせで植物園に
暮るる春の日

地に寝てふと見まわせば春の木のさびしくも
芽をふけるものかな

葉を茂みしだれて地に影の濃きこの櫛の樹に
夏の来にけり

はつ夏の常盤樹のかげのなつかしやこの蔭出
でじ日の照るものを

楠の蔭の暗きを憎み櫛のかげのくらしきを愛で
つかなしみて居る

身にちかき木の根木の根をながめやりつめた
き春の地にまろび居り

立ち出でつとほく離れて見るときかの櫛の
樹の春はさびしき

四月十三日午前九時、石川啄木君死す。

初夏の曇りの底に桜咲き居りおとろへはてて
君死ににけり

午前九時やや晴れそむるはつ夏のくもれる朝
に眼を瞑げてけり

君が娘は庭のかたへの八重桜散りしを拾ひう

つつとも無し

病みそめて今年も春はさくら咲きながめつつ
君の死にゆきにけり

酔のごとき入日に浮む麦の穂の穂さきかなし
や摘まむと思ふ

しとしとに入日やどせる青麦のあをき穂すゑ
を揺すりてもみる

わが蒼き片頬にあたる血のごときいろの入日
を貪り吸ふも

背のかたに沈む入日に染められて袂もおもく
野を帰るなり

野は入日、いばらのかけにありやなし水もな
がれて我が帰るなり

入日あかき野なかの村にひと群れて家つくり
居り唄の声悲し

夕陽揺り海のうねればうら悲し、わが立つ崎
も揺れて沈まむ (五首鎌倉にて)

眼のまへを巨いなる浪あをあをとうねりてゆ
きぬ春のゆふぐれ

眼に映る陸無し、岬浪にゆれわがかなしみぞ
ひとりたなびく

わだつみの浪の一ひら掌にもちて死なむとぞ
思ふ夕陽のまへに

並み立てる岬のあひにゆらゆらと海のゆれ居
てゆふぐれとなる

いたづらに窓に青樹の葉のみ揺れわれらが逢
ふ日さびしくもあるかな

かなしき岬

うら若き越後生れのおいらんの冷たき肌を愛
づる朝かな

笑みながらじつと見つむるまなざしに青みて
夏の朝は来にけり

おいらんのなかばねむりて書くふみに青くも
させる朝の太陽

なにやらむ妹女郎をたしなむる姉の女郎に朝
はさびしき

摘みては投げつみては顔に投げうちぬおいら
んの部屋の朝の草花

お女郎屋の物干台にただひとり夏の朝を見に
のぼるかな

初夏の朝の廊下のつめたきにまろびて起きぬ
若きおいらん

とられたるままのこの手のうす青さ別れとも
なきこのあしたかな

手もとらず夏の朝の階子段うつとりとして降
りてこしかな

桐の花うすく汗ばみ日ものぼりわがきぬぎぬ
のときとなりゆく

いつ知らずくるわの恋のあはれさの身にやど
れるにしみじみとする

はつ夏の街の隅なる停車場のほの冷たさを慕
ひ入るかな

われ人もおなじ心のさびしさか朝青みゆく夏
の停車場

しみじみと遠き辺土のたび人のさびしき眼し
て停車場に入る

朝な朝な停車場に来て新聞紙買ふ男居りて夏
となる街

水無月の青く明けゆく停車場に少女にも似て
動く機関車

月の夜の青色の花揺ぐごと人びとの顔浮ける
停車場

停車場のあまき燻煙のまひ来るレストラント
の窓の焼肉

午前九時、起きも出づればこの市街はやも五
月の雲にくもれる

青じめり五月の雲にしびれたる市街の朝の若
人の眼よ

青いろの酒をしぞ思ふ朝曇る夏の銀座の窓を
しぞ思ふ

五月の末、相模国三浦半島の三崎に遊べり、
歌百拾一首。

あさなあさな午前は曇るならひとて今日も悲
しく海をおもへり

海恋ふる心頭痛に交りゆき午前は曇る初夏の
街

恋ひこがれし海にゆくとて買ふシヤボンわが
着き掌に匂ふ朝の街